

和俗童子訓卷之二

○總論下

一 幼いさげなき時ときより、孝弟かうていの道みちを専もつぱらに教をしふべし。孝弟かうていを行なふには、愛敬あいけいの心法しんぽうを知るべし。愛あいとは人ひとを慈いづくしみ、いとをしみて、おろそかならざるなり。敬けいとは、人ひとを敬うやまひて、侮あはらざるなり。父母ふぼをいつくしみ敬うやまふは孝かうなり。是これ愛敬あいけいの第一だいいちの事ことなり。次つぎに兄あにをいつくしみ敬うやまふは弟ていなり。又またをちをばなど、凡年おおよそとし長ながぜる人ひとをいつくしみ敬うやまふも弟ていなり。次つぎに我われが弟おそ従い兄弟いせ甥せむいなど、又まためしつかふ下部しもべなど、其そのほどにしたがひて、いつくしむべし。いやしき者ものをも、侮あはりおろそかにすべからず。各おの其位くらゐにしたがひて、愛敬あいけいすべし。およそ愛敬あいけい二にの心こころは、人倫じんりんに對たいする道みちなり。人ひとにまじはるに、我われが心こころと顔色かほいろをやはらけ、人ひとを侮あはらざるは、是これ善よきを行なふはじめなり。我われが氣きにまかせて、位くらゐに驕おごり、才さいにはこり、人ひとをあなどり、無禮むらいをなすべからず。

朝は云々一
前註一〇
一頁参照

弟子入則孝
するの一章
論語學而
篇に、子曰
く、弟子入
つては則ち
孝、出でて

一少年にて、師にあひて物をならふに、朝は師に學び、晝は朝學びたる事を勤め、夕べはいよくかさね習ひ、夜ふして、一日の中に口に言ひ、身に行ひたる事を顧みて、あやまちあらば、悔いて、後のいましめとすべし。
一人の弟子となり、師に仕へては、我が位高しといへども高ぶらず、師を尊び敬ひて重んずべし。師を尊ばざれば、學問の道たゞず。師たる人、教を弟子に施さば、弟子これに法り習ひ、師に對して、心も顔色も、和かに敬ひ慎み、我が心を虚しくして自滿なく、既に知れる事をも、知らざる如くし、又よく行ふ事をも、よくせざる如くにして、へり下るべし。師より受けたる教をば、心を盡してきはめ習ふべし。是弟子たる者の、師にあひて教を受くる法なり。
一論語の、子曰弟子入則孝するの一章は、人の子となり弟となる者の法を、聖人の教へ給へるなり。我が家に在ては、まづ親に孝をなすべし。孝とは善く父母に事ふるをいふ。能く事ふるとは、孝の道を知りて力を盡すをいふ。力を盡すとは、我が身の力を盡してよく父母に事へ、財の力を盡して能く養ふをいふ。父母に事ふるには、力を惜むべからず。次に親の顔を退き出でては、弟を行ふべし。弟は善く兄長に事ふるをい

は則ち弟、
謹んで信じ
汎く衆を愛
して仁に親
しみ、行餘
力あれば則
ち以て文を
學ぶ

子のかみ一
子の上にて
子女の頭と
いふ義也、
古語に兄を
このかみと
云へり



ふ。兄は子のかみにて、親に近ければ、敬ひ従ふべし。もし兄より弟を愛せずとも、弟は弟の道を失ふべからず。兄の不友を似せて、不弟なるべからず。其外親戚傍輩の内にて、年老いたる長者をば、敬ひて侮る事なかれ。是弟の道なり。凡孝弟の二は、人の子弟の行の根本なり。尤勤むべし。謹とは、心に恐ありて、萬の事の誤なからんやうにするなり。萬の事は、謹より行はる。謹なければ、萬事亂れて、善き道行はれず。萬の過も禍も、皆つゞしみなきよりおこる。謹めば心に怠なく、身のわざいに誤少なし。謹の一字、尤大切のこと也。若き子弟の輩は、殊更是を守るべし。信とは、言に偽なくで、誠あるを云ふ。身には行はずして、口に言ふは、信なきなり。又人と約して、其事を變ずるも、信なきなり。人の身のわざ多けれども、口に言ふと身に行ふとの二より外にはなし。行をつゞしみて、言に信あるは、身を修むるの道なり。汎愛衆とは、我がまじはり對する所の諸人に情ありて、ねんごろにあはれむを云ふ。下人を使ふに情深きも、亦衆を愛するなり。親仁とは、善人に親み近づくを云ふ。汎く諸人を愛して、其内にて、とりわき、善人をば親むべし。善人を親めば、善事を見習ひ聞きならひ、又其諫を受け、我が過を聞きて改むるの

唯二十五字
一弟子入則
孝出則弟謹
而信汎愛衆

益あり。此六事は、人の子となり弟となる者の、身を修め人に交る道なり。勤め行ふべし。行つて餘力あれば、則用ひて學文とは、餘力はひまなり。上に見えたる孝弟以下六事を勤め行ひて、其ひまには、又古の聖人の書を讀んで、人の道を學ぶべし。いかに聰明なりとも、聖人の教を學ばざれば、道理に通ぜず、身を修め人に交る道を知らずして、過多し。故に必古のふみを學んで、其道を知るべし。是則身を修め道を行ふ助なり。次には日用に助ある六藝をも學ぶべし。聖人の經書を讀み、藝を學ぶは、すべて是文を學ぶなり。文を學ぶが内にも本末あり。經傳を讀んで學問するは本なり。諸藝を學ぶは末なり。藝はさまざま多し。其内にて、人の日に用ふるわざをえらびて學ぶべし。無用の藝は、學ばずとも有りなん。藝も亦道理あることにて、學問の助となる。これを知らずは、日用の事缺けぬ。藝を學ばざれば、たとへば木の本あれども枝葉なきが如し。故に聖人の書を學んで、其ひまには文武の藝を學ぶべし。此章唯二十五字にて、人の子となり、弟となるものゝ行ふべき道、是に盡せり。聖人の語、詞少なくて義備れりと云ふべし。

而親仁行有
餘力則以學
文の二十五
字也

放逸に流れ、淫行を行ひ、一かたに悪しき道に赴きて、よき事を好まず。孝弟を行ひ、家業を勤め、書を讀み、藝術を習ふ事をきらひ、少しの勤もむつかしがりて、頭いたく氣なやむなど云ひ、萬のつとむべき業をば、皆氣つまるゝと勤めず。父母は愛に溺れて、唯其氣隨に任せて、放逸を免しぬれば、いよく其心ほしいまゝになりて、習ひて性となりぬれば、よき事をきらひむつかしがりて、氣つまり病起ると云ひて勤めず。中にも、書き讀む事を深くきらふ。凡氣のつまるゝといふ事、皆よき事をきらひ、むつかしく思へる氣隨より起れる病なり。我が好き好める事には、終日終夜心を盡し力を用ひても氣つまりらず。圍碁を好むもの、夜を打明しても、氣つまりざるを以て知るべし。又蒔繪師、彫物師、縫物師など、いと細なるむつかしき事に、日夜心力と眼力を盡す。かやうの業は、面白からざれども、家業なれば、勤めてすれども、未だ氣つまり病者となるといふ事を聞かず。むつかしきをきらひて、氣つまりるといふは、孝弟の道、家業のしわざなどの、よき事をきらふ氣隨より起れり。是孝弟人倫の勤行はれずして、學問諸藝の稽古のならざる本なり。書を讀まざる人は、學問の事不案内なる白徒なれば、讀書學問すれば、氣つまり氣へりて、病者となり、命もちゝまると思

耐煩—明の
費元録の言
に、煩に耐
ふの二字最
も妙、能く
煩に耐へば
天下何物か
做す可から
ざらん

へり。是其理を知らざる愚痴なる世俗のまよひなり。凡學問して、親に孝し、君に忠し、家業を勤め、身を立て、道を行ひ、よろづの功業をなすも、皆むつかしき事をきらはず、苦勞をこらへて、其わざを能く勤むるより成就せり。むつかしき事、しけきわざに、心おだやかに苦まずして、一筋にしづかに爲しもてゆけば、後は其事になれて、面白くなり、心を苦むる事もなくて、其事遂に成就す。又むつかしとて事をきらへば、心から事を苦みて、勤むべき事をむつかしとするは、心の僻事なり。心のひが事をば、其まゝにおきて、事の多きをきらふは誤なり。又耐煩とは、むつかしきをこらふるを云ふ。此二字を守れば、天下の事何事もなすべしと、古人云へり。是若き子弟の輩の守るべき事なり。

一 小兒の時は、必 惡しき癖、惡しきならはしなど有るを、自ら惡しき事と知らば、改めて行ふべからず。又かゝる惡しき事を、人の諫にあひ戒められれば、悦んで早く改め、後年まで永く其事をなすべからず。一たび人の諫めたる事は、永く心にとめて忘るべからず、人の諫を受けながら改めず、やがて忘るゝは、守なしと云ふべし。守なき人は、善き人となり難し。況や人の諫をきらひ怒り、恨むる人はさらなり。人の諫を

過を改むる
は云々—左
傳に、人聖
人にあらず
誰か過無か
らん過つて
能く改む善
焉より大な
るはなし

聞かば、悦んで受くべし。必 怒り背くべからず。諫を聞きて、もし悦んで受くる人は善人なり。能く家を保つ。諫をきらひふせぐ人は、必 家を破る。是善惡の分るゝ所なり。諫むる事、理に違ひたりとも、背きて争ふべからず。諫を聞きて怒れば、重ねて其人諫を言はず。凡 諫を聞くは、大に身の益なり。諫を聞きて、悦んで受け、我が過を改むるは、善是より大なるはなし。人の惡事多けれど、諫を嫌ふは、惡のいと大なるなり。我が身の惡しき事を知らせ、あやまちを諫むる人は、尊み親むべし。わづかなる食物など送るをだに、悦ぶならひなり。況や諫を言ふ人は、甚悦び尊ぶべし。

一 幼き時より、善を好んで行ひ、惡を嫌ひて去る。此志專一なるべし。此志なければ、學問しても益をなさず。小兒の輩、第一にこゝに志あるべし。此事、前にもすでに言ひつれども、幼年の人々のために、又返すぐ丁寧に告ぐるなり。人の善を見ては、我も行はんと思ひ、人の不善を見ては、我が身を顧みて、其ごとくなる不善あらば改むべし。此の如くすれば、人の善惡を見て、皆我が益となる。もし人の善を見て、我が身に取りて用ひず、人の不善を見ても、我が身を顧みざるは、志なし



身の力財の力を盡す論語學而篇に、父母に事へて能く其力を竭し君に事へて能く其身を致す云々

と云ふべし。愚なるの至なり。

一父母の恩は、高く厚きこと天地に同じ。父母なければ我が身なし。其恩報じ難し。孝を勤めて、せめて萬一の恩を報ゆべし。身の力、財の力を盡すべし。惜むべからず。是父母に事へて、其力を盡すなり。父母死して後は、孝を盡す事成り難きを、兼て能く考へて、後悔なからん事を思ふべし。

一年若き人書を讀まんとすれば、無學なる人は是をいひ妨けて、書を讀めば、心ぬる病者になりて、氣よわく命短くなると、言つておどせば、父母おろかなれば、誠ぞと心得て、書を讀ましめず、其子は一生愚にて終る。不幸といふべし。

一人の善悪は、多くはならひなるによれり。善に習ひなれば善人となり、惡に習ひなれば惡人となる。然れば、幼き時より、習ひなる事、慎むべし。假にも惡しき友に交れば、ならひて惡しき方に早く移り易し。恐るべし。

一師の教を受け、學問する法は、善を好み行ふを以て、常に志とすべし。學問するは、善を行はんが爲なり。人の善を見ては、我が身に取りて行ひ、人の義ある事を聞かば、心にむべなりと思ひ感じて行ふべし。善を見、義を聞きても、我が心に感ぜず、身に

あさいいは睡の義なり、朝寝するをいふ

取用ひて行はずば、むげに志なく力なしといふべし。我が學問と才力と勝たりとも、人にほこりて自滿すべからず。言にあらはしてほこるは、云ふに及ばず、心にもきざすべからず。志は偽り邪なく、誠ありて正しかるべし。心の内は、おほひ曇なく、裏表なく、純一にて、青天白日の如くなるべし。一點も心の内に邪惡を隠して、裏表あるべからず。志正しきは、萬事の本なり。身に行ふ事は正直にして、道にまけず。邪にゆがめる事を行ふべからず。外に出て遊び居るには、必常の然るべき親戚朋友の所を定めて、妄にあなたこなた用なき所に行かず、其友として交る所の人をえらびて、善人に常に近づき、良友に交るべし。善人に交れば、其善を見習ひて、善言を聞き、我が過を聞きて、益多し。惡しき友に交れば、早く惡に移り易し。必友をえらびて、かりそめにも惡友に交るべからず。恐るべし。朝には早く起きて親に事へ、事をつとむべし。あさいして忘るべからず。凡人の勤は、朝を初とす。あさいする人は、必怠りて萬事行はれず。夜に至りても事を勤むべし。早くいねて事を忘るも、用なきに夜更るまでいねがてにて時を誤るも、共に子弟の法に背けり。衣服を著、帶をしたる形も整ひて、威儀正しかるべし。放逸なるべからず。朝毎に、昨日いまだ知らざる



心をあらく云々―心を疎大にせず、密約にして小にせよと也

神祇をば云云―論語雍也篇に、鬼神を敬して之を遠ざく知と謂ふ可し

小兒十歳なれば云々―内則に、十年出でて外

傳に就き外に居宿して書計を學ぶ云々

さきを師に學びそへ、暮毎に、朝學べる事を重ねて勤めて、怠るべからず。心をあらくおほやうにせず、つゞまやかにすこしにすべし。斯の如くに、日々に勤めて怠らざるを、學問の法とす。

一子弟孫姪など、幼き者には、禮義を正しくせん事を教ふべし。淫亂色慾の事、戯のことは、非禮のわざを戒めて、爲さしむべからず。又道理なき正しからざる札守祈禱などを、妄に信じて迷へること、禁すべし。幼く若き時より、かやうの事に心迷ひぬれば、其心くせになりて、一生其迷とけざるものなり。神祇をば恐れ尊び、敬ひて遠ざかるべし。なれ近づきて、けがし侮るべからず。我が身に道なく私ありて、神に詔ひ祈りても、神は正直聰明なれば、非禮をうけ給はず、へつらひを悦び給はずして、利益無き事を知るべし。

一古もろこしにて、小兒十歳ならば、外に出して、晝夜師に隨ひて、學問所に居らしめ、常に父母の家におかず。古人此法深き意あり。如何となれば、小兒常に父母の側に居て、恩愛にならへば、愛をたのみ思になれて、日々にあまへ氣隨になり、艱苦の勤なくして、徒に時日を過し、教行はれず、且孝弟の道を父兄の教ふるは、我が

身に能く事へよとのすまめなれば、同じくは、師より教へて行はしむるが宜し。故に父母の側をはなれ、晝夜外に出て、教を師にうけしめ、學友に交らしむれば、おごり怠なく、智慧日々に明かに、行義日々に正しくなる。是古人の子を育つるに、内にをらしめずして、外に出せし意なり。

一子孫年若き者、父祖兄長のとがめを受け、怒にあはざ、父祖の言の是非をえらばず、おそれ慎みて聽くべし。いかにはけしき悪言を聞くと、ちりばかりも怒り恨みたる心なく、顔色にも顯すべからず。必我が理ある事を言ひ立て、父兄の心に背くべからず。唯ことば無くして、其責を受くべし。是子弟の父兄に事ふる禮なり。父兄たる人、もし人の言を聞き損じて、無理なる事を以て、子弟をしへたけ責むとも、怒るべからず、恨みそむける色を顯すべからず。言ひわけする事あらば、時過ぎて後謝すべし。或は別人を頼みて言はしむべし。十分に我に道理なくば、言ひわけすべからず。一子弟を教ふるに、いかに愚不肖にして、若く賤しきとも、甚忿り罵りて、顔色と言をあらゝかにして、惡口して、恥むべからず。此の如くすれば、子弟我が非分なる事をば忘れて、父兄のいましめを怒り恨み、そむきて隨はず、かへつて父子兄弟の



口のききたる者一口先の達者なる者の意

孝子の深愛ある者は云云―禮記祭

儀に、孝子の深愛有る者は必ず和氣有り、和氣有る者は必ず愉色有り、愉色有る者は必ず婉容有り
おいさき―生先にて、生長行く前途の意なれば、おひさきとあるべき也
下士は道を聞きて大に笑ふ―老子の言

間も不和になり、相破れて、恩をそこなふに至る。唯從容として嚴正に教へ、幾度もくり返し、やうやく告げ戒むべし。是子弟を教へ、人材を養ひ成す法なり。父兄とされる人は、此心得あるべし。子弟となる人は、父兄の怒甚しく、悪口して責め恥めらるゝとも、いよく恐れ慎みて、つゆばかりも怒り恨むべからず。

一 小兒の時は、智いまだひらけず、心に是非を辨へがたき故に、小人の言ふ詞にまよひ易し。世俗の口のききたる者、學問をきらひて、善人の行儀堅く正しきをそしり、風雅なるを悪みて、今様の風にあはずとて謗り、唯放逸なる事を誘ひ勸むるを聞かば、いかに幼く智なくとも、心をつけて其是非を分つべし。斯の如くなる小人のことはに迷ひて、移るべからず。

一 怒をおさへて忍ぶべし。忍とはこらふるなり。殊に父母兄長に對し、少しも心に怒り恨むべからず。況や顔色と眼目に顯すべけんや。父兄に對して怒るは、是大なる無禮なり、いましむべし。内に和氣のれば、顔色も目つきも和平なり。内に怒氣あれば、顔色眼目悪し。父母に對して、悪眼を顯すべきや、恥づべし。孝子の深愛ある者は、必ず和氣あり。和氣ある者は、かならず愉色あり。子たるものは、父母に對して和

氣を失ふべからず。

一人のほめそしりには、道理に違へる事多し、悉く信すべからず。愚なる人は、聞くに任せて信ず。人の言ふこと、我が思ふこと、必理に違ふこと多し。殊に少年の人は、智恵くらし。人の言へる事を悉く信じ、我が見る事を悉く正しとして、妄に人をほめそしるべからず。

一 幼き時より、年老いておとなしき人、才學ある人、古今世變を知れる人になれ近づきて、其物語を聞き覚え、物に書きつけ置きて、忘るべからず。又疑はしき事をば、知れる人に尋ね問ふべし。ふるき事を知れる老人の物語を聞く事を好みて、嫌ふべからず。かやうにふるき事を好み聞きてきはらず、物事に志ある人は、後に必人にすぐるゝものなり。又老人をばむつかしとてきらひ、ふるき道々しき事、古の物語を聞きては、恨しく思ひ、其席にこらへず、陰にて謗り笑ふ、是凡俗の賤しき心なり。かやうの人は、おいさきよからず、人に及ぶこと難し。古人のいはゆる、下士は道を聞きて大に笑ふと云へる、是なり、かやうの人には、交り近づくべからず。必悪しき方にながる。蒲生氏郷いとけなき時、佐々木氏より人質として、信長卿に來り

蒲生氏郷一
初めて若松
の城主なり
し人、本名
は教秀又賦
秀、幼字を
鶴千代とい
へり、野史
に據るに、
本文の事實
中或人と有
るは稻葉一
徹なるべし

仕へられし時、信長の前にて、老人の軍物語するを、耳を傾けて聽かれける。或人
是を見て、此童たゞ人にあらず、後は必名士ならんと云ひしが、果して英雄にてぞ
ありける。凡若き人は、老人の古き物語を好み聞きて、覺え置くべし。若き時は、多
くは古き物語を聞く事をきらふ。いましむべし。又若き時、我が先祖の事知れる人あ
らば、能く問ひ尋ねて、記しておくべし。若かくの如くにせず、うかと聞きては覺えず、
年たけて後、先祖の事を知りたく思へども、知れる人既になくなりたれば、問ひて
聞くべきやうなし、後悔にたへず。子孫たる人、我がおや先祖の事知らざるは、無
下におろそかなり。況や父祖の善行武功など有るを、其子孫知らず、知れども顯さざ
るは愚なり、大不孝とすべし。

一父母やはらかにして、子を愛し過せば、子怠りて父母を侮り、愼まずして行儀あしく
氣隨にして身の行あしく、道に背く。父たる者、威ありて恐るべく、行儀ありて手
本になるべければ、子たる者恐れ愼みて、行儀正しく、孝をつとむる故に、父子和睦す。
子の賢不肖、多くは父母のしわざなり。父母いるがせにして、子の悪しきをゆるせ
ば、悪を長せしめ、不義におちいる。是子を愛するに非ずして、かへりて子をそこな

上智と下愚
一論語陽貨
篇に、子曰
く唯上知と
下愚とは移
らず

ふなり。子を育つるに、幼きより能く教へ戒めても悪しきは、誠に天性の悪しきな
り。世の人、多くは愛に過ぎておごらしめ、悪を戒めざるゆゑ、習ひて性となり、終
に不肖の子となる者多し。世に上智と下愚とはまれなり。上智は教へずしてよし、下
愚は教へても改め難しと云へども、悪を制すれば面は改まる。世に多きは中人なり。
中人の性は、教ふれば善人となり、教へざれば不善人となる。故に教なくんばあるべ
からず。

ざればみ
しやれ氣取
りて眞面目
ならざるを
いふ
ちとくすみ
過ぎたるは
一少しくく
すみ過ぎて
派手ならざ
る品はの意
あてやか
上品の意

一小兒の衣服は、華やかなるも苦しからずといへども、大もやう、大じま、紅紫など
のざればみたるは著るべからず。小兒も、ちとくすみ過ぎたるは、あてやかにて賤し
からず。華やか過ぎて目に立つは、賤しくして下部の服の如し。大方衣服の模様にて
も、人の心はおし量らるゝものなれば、心を用ふべし。又身の飾にひまを用ひ過すべか
らず。ひま費えて益なし。唯身と衣服に穢なくすべし。

一農工商の子には、幼き時より、唯物書算數をのみ教へて、其家業を専らに知らしむ
べし。かならず樂譜淫樂、其外いたづらなる無用の雜藝を知らしむべからず。是に
ふけり溺れて、家業を勤めずして、財を失ひ家を亡せしもの、世に其例多し。富人の



もてなさば
一取扱は
ば、育まば
の意

子は、立居振舞飲食の禮などをば習ふべし。必戒めて、無頼放逸にして酒色淫樂を好む悪友に交らしむべからず。是に交れば、必身の行悪しく、不孝になり、財を失ひ、家を破る、甚恐るべし。

一 小兒は十歳より内にて、早く教へ戒むべし。性悪しくとも、能く教へ習はさば、必よく成るべし。いかに美質の人なりとも、悪しくもてなさば、必悪しきに移るべし。少年の人の悪しくなるは、教の道なきが故なり。習を悪しくするは、譬へば馬にくせを乗り附くるが如し。いかに曲馬にても、よき乗手の乗れば、よくなるものなり。また鶯のひなを飼ふに、初て鳴く時より、別によく囀る鶯を其傍に置きて、其音を聞きならはしむれば、必よく囀りて、後までかはらず。是初よりよき音を聞きて習へばなり。禽獸といへど、早く教へぬれば、善に移り易きこと此のごとし。況や人は萬物の靈にて、本性は善なれば、幼き時より、能く教訓したらんに、勝れたる悪性の人ならずば、なか悪しくならん。人を教訓せずして悪しくなし、其性を損ずるは、惜むべき事ならずや。

一子孫幼き時より、堅くいましめて、酒を多く飲ましむべからず。飲みならへば、下

尙書には云
云一書經周
書酒誥に、
祀のみ茲に
酒をせよと
あるをいふ

狂藥一范管
公の詩に、
爾を戒む酒
を嗜む勿れ

戸も上戸となりて、後年に至りては、いよく多く飲み、恣になり易し。癖となりては一生改まらず。禮記にも、酒者所以養老也、所以養病也と云へり。尙書には、神を祭るにのみ酒を用ふべき由を云へり。然れば、酒は老人病者の身を養ひ、又神前に備へん料に造れるものなれば、年少の人の、恣に飲むべき理にあらず。酒をむさほる者は、人のよそ目も見苦しく、威儀を失ひ、口のあやまり、身のあやまりありて、徳行をそこなひ、時日を費し、財寶を失ひ、名をけがし、家を破り、身を亡すも、多くは酒の失よりおこる。又酒を好む人は、必血氣を破り、脾胃をそこなひ、病を生じて、命みじかし。故に長命なる人、多くは下戸なり。たとひ生れつきて酒を好むとも、若き時より慎みて、多く飲むべからず。凡上戸の過失甚多し。酔に乗りては、謹厚なる人も狂人となり、言ふまじき事を言ひ、爲すまじき事をなし、ことば少なき者も、言葉多くなる。戒むべし。酒後のことば、慎みて多くすべからず。又酔中の怒を慎み、酔中に書状を人に送るべからず。むべも昔の人は、酒を名づけて狂藥とは云へりけん。貧賤なる人は、酒を好めば、必財を失ひ、家を保たず。富貴なる人も、酒にふければ、徳行亂れて、家を破る。高き賤しき、其わざはひは逃れず。戒む



狂薬にして
佳味に非ず

べし。

一 小兒のともがら、たはぶれおほ 戯多たはぶれおほくいふべからず、人の怒いかりをおこす。又人のきらふ事言ふべからず、人に怒いかりり諍まじられて益なし。世の人多く賤いやしき事いふとも、それを習ならひて、賤いやしき事いふべからず。小兒せうにの言葉賤いやしきは、殊ことに聞きにくし。

